

## 〈原著論文〉

広島女学校における子ども主体の  
カリキュラムの実際と教師の共感

橋 川 喜 美 代\*

## Practicality of Child-centered Curricula and the Empathic Understanding of Teachers

Kimiyo Hashikawa

**要旨：**本研究では、1937（昭和12）年にランバス女学院保育専修部に入学した南信子が1939（昭和14）年に学んだ「保育案」を手掛かりに、クックが目指した子ども主体の保育に見られる「主体的、対話的で深い学び」の実際を解明した。その結果、次の3点が明らかとなった。①週題を中心に統合された「作業・活動」「歌・遊戯」「会話」「観察」による活動が子どもの生活内容を豊かにし、個々の「作業・活動」を仲間との相互生活を通してまとまりのある創造的製作へと高めていく。②この創造的製作が「主体的、対話的で深い学び」を生み出し、望ましい社会的で道徳的な習慣形成に繋がる。③子どもの「主体的、対話的で深い学び」を生み出す鍵は保育者の共感的まなざしである。

**Abstract：** The purpose of this research was to clarify the practicality of “subjective, interactive, and deep learning” as favored by Margret M. Cook for child-centered childcare at the kindergarten of Hiroshima Girls School. The Program for the Year, studied by Nobuko Minami in 1939 at the Lambuth Training School for Christian Workers, was used to aid the research, from which the following three points were extracted：

- (1) Weekly topics integrated categories such as work/activity, songs/games, conversation, and observation. These led to more fulfilling lifestyles for the children, as well as more creative and accomplished work—a result of each child’s work/activity with their classmates；
- (2) This improved work was found to generate further “subjective, interactive, and deep learning”，which in turn led to ideal social and ethical habits；and,
- (3) The key to this “subjective, interactive, and deep learning” is the empathic understanding of the teacher.

**Key words：** 広島女学校 Kindergarten of Hiroshima Girls School 子ども主体のカリキュラム Child-centered Curricula 主体的、対話的で深い学び Subjective, interactive and deep learning 共感 Empathic understanding

## はじめに

2017年改訂の学習指導要領により、幼児期から大学まで一貫してアクティブラーニングによる指導が目指されるようになった。アクティブラーニングは、「どのように学ぶか」といった一人ひとりの学び方に注目して、「主体的、対話的で深い学び」について指導し、生涯にわたって学ぶ力を身につけるよう指導していこうというものである。幼児期の教育では今まで以上に、体験を通じて、感じたり、考えたりすることを大切に、学ぶ楽

しさを知り、自分から進んで学ぶ姿勢を身につけるような指導が求められてきている。今まで以上と言われるのも、幼児期にあっては「主体的、対話的で深い学び」が新しいものではないからである。

1892（明治25）年に開園された英和女学校（後、聖和大学）附属幼稚園は、アメリカ人教育宣教師らが進歩主義教育をいち早く導入し遊びによる自由な教育と幼児の「主体的、対話的で深い学び」を模索し続けた<sup>1)</sup>。1886（明治19）年10月、砂本貞吉が広島に開いた私塾「広島女学会」創設から始まる私立英和女学校（後、広

受付日 2018. 5. 21 / 掲載決定日 2018. 9. 7

\*関西福祉科学大学 教育学部 教授

島女学校)は、翌年 10 月には、ケンタッキー州出身のゲーンズ (Gaines, N. B.) を初代校長として招聘した。1891 年に開設された幼稚園はキリスト教への反対や新園舎が火災で焼失するという災難に見舞われたが、翌年 9 月には正式開園された。ゲーンズは中心統合の提唱者、クック郡師範学校のパーカー (Parker, F.) やコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジのヒル (Hill, P. S.) との交流が深く、1895 (明治 28) 年 4 月に発足した保姆養成科 (1908 年に保姆師範科に改称) ではいち早く中心統合主義カリキュラムを受容し、機械的な恩物教授法の克服を目指していく<sup>2)</sup>。これをリードしたのが、1904 (明治 37) 年に着任したクック (Cook, M. M.) である。1911 (明治 44) 年の休暇帰国に際し、コロンビア大学でデューイ (Dewey, J.) から新教育を学んだクックは、1912 年に来任したフルトン (Fulton, J.) とともに、従来の時間割を廃止し、木片、古箱、空き缶などの材料を豊かに揃えた自由な製作時間での主体的で協同的な遊び・学びの解明に挑み始める<sup>3)</sup>。

1919 (大正 8) 年、「広島女学校の再組織に関する事項」がアメリカ・南メソジスト監督教会宣教会議で協議され、広島女学校の保姆師範科と神戸のランバス記念伝道女学校を大阪で合併することが決議された。1921 (大正 10) 年、クックは保姆師範科生であった上野 (間島) 光・立花富ら 3 名を連れて、広島から大阪に移った。翌 4 月、広島女学校保姆師範科は廃止され、神学部と保姆専修科とをもつランバス女学院が発足した。1928 (昭和 3) 年、クックは進歩主義に基づいた保育への転換を決意し、この保育の礎を築いたのがピービー (Peavy, A.) である。ピービーは、「自由作業」(free play and work) を中心とした自由な保育を確立する要として、遊びや活動を深める教師の資質・能力を重視した。ピービーが教師に求めたのは、子どもたちの創造性を刺激し高めるだけの知識・技能を持っていることである。子どもに自由に仕事を選ばせるということは、何の考えもなく、ただ気の向くままにやらせることではない。店、駅、郵便局、消防署等子どもの興味を刺激するような社会生活が営まれている場を見学させたり、珍しい本や絵を見せたり、子ども自身に自分の経験を話させたりすると共に、そこで得た観念を創造的作業へと発表するための環境整備が求められた。1 つの活動に多様な変化を与えるには、教師が最も優れた価値ある活動、または豊富な活動を選び、子どもたちを導くだけの明確な考えと、そのために必要な材料を数多く用意することが教師の責任とされる<sup>4)</sup>。

「子供達には只見たり聞いたりした丈では何でも其物が真に自分のものとしてしっかり這入りません。ですから

行って後自分達の経験した事を積木やその他の材料を造って見たり、絵をかいいたり、劇的遊をしたり一緒にその経験を話合ったりする事が大切です。故に見てきた後は先生が気をつけて、子供の心を刺激する様な材料や話や絵を用意して、此等のものを通して彼等の経験を深め、真の意味がわかる様にしてやらねばなりません。」と。

こうして目指されたのが、人格の基礎としての社会的態度の育成である。教師は次のような社会性を持った個の育成を心がけるよう求められた<sup>5)</sup>。

「一つ一つの経験を通じて、果たして子供達が価値ある知識を得ているか、その現在の環境に取り入れねばならぬ価値ある活動をしているか、其技術及び行為に進歩発達があるか、亦は他の子供と共同し得る程度、自分の順番を喜んで守る事等が以前よりも進んできているかどうか、他の者に譲つ事が出来るか、秩序がわきまえられるか、材料の用い方扱い方後始末等が発達しているか等を見、尚これらの活動により他の者に対し亦其環境に対する態度が如何に変化されて行っているか、他の者の喜びとか満足とかを助長する時に起る自分の喜びを味わう事が出来ているか」等の観点から、子どもの成長・発達が確認されたのである。

立花富は「自由作業」による日常の経験と興味に基づいたピービーの取り組みを、「教師が立てた計画で子どもをひっぱる」やり方から「子どもが中心で、教師はよく子どもを観察して子どもの求めるものから教育する」やり方への転換であったと回想する。客体にすぎなかった子どもは一人の人間として尊重され、「主体的、対話的で深い学び」を通して他者と協同しながら主体的に生きる態度を身に付けることが求められるようになった<sup>6)</sup>。

「今日この子がこうすると思ったらこうしたとか、今日はこうなって、明日はどうなるか、子どもの製作品なんか、子どもが帰った後、ながめて記録した。それから子どもの話し合いなんか多くてそれに対して他の子がどう言ったのか、それが子どもたちの協力によってどう変わっていくのか、それがどんどん出てくるわけでしょう。だから、こちらが計画立てている暇がない。もう次々次々ですね。こういういろんなことが起こってくるわけ。そして、そういう場合の子どもってのはね、私達 1 つ 2 つのことしか知らないと思っているけど、そうではなくてどんなことに対しても 10 ぐらいのこと知ってて答えることもってますね。今までの自分たちの生活の中から、あれかな、これかなと出してくるわけです。それで、はあ、そんな面もあるのかな、私ひとりで計画をたてたらこんなにならないわと思った。」という。

本研究では、1937 (昭和 12) 年にランバス女学院保育専修部に入學した南信子が 1939 (昭和 14) 年に学ん

だ「保育案」を手掛かりに、クックが広島女学校時代から目指した子ども主体の保育に見られる「主体的、対話的で深い学び」の実際を明らかにすることを目的とする。南は1939年4月から研究科に進学<sup>7)</sup>。研究科卒業後、岩国教会附属幼稚園、日本メソジスト大阪鶴町教会附属幼稚園に勤務した。さらに、1943（昭和18）年には聖和女子学院附属聖和幼稚園勤務となり、主任であった立花から強い影響を受けた人物である。

## I 子ども主体の保育を求めて

### 1. 「遊びによる教育」確立への準備段階

1923（大正12）年、クックは子ども主体のカリキュラムの基礎となる教育原理と年間指導計画の主題を作成した<sup>8)</sup>。手書きの英文は判読しがたいが、表1に示すように、クックが子ども主体の保育を求めて掲げた宗教的理念は「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである」（ヨハネ福音書10:10）の聖句であり、クックら宣教師の使命そのものであった。

「目的」には、「子どもたちと共に生きる」とフレーベルの言葉を掲げている。この点からも進歩主義教育の導入は、機械的な恩物指導に陥っていたフレーベル主義教育の改良にあった。幼稚園の役割は適切な環境のもとで行われる日々の経験を通して、子どもたちに生活を理解させると共に、肉体的、精神的、霊的に個を発達させ、家族や地域社会、人類の一員として成長し得る基礎を家庭に据える助けをすることにある。そこにはキリスト教保育を行う幼稚園の姿勢と教師の心構えが強調されていた。

その方法は、「遊びによる教育」である。幼稚園では

子どもの合自然な遊びの本能を利用したり、興味や知りたい、やりたいという欲求を刺激したりするために、環境を整備し、子どもの本性や他児との交わりの中で成長しつつあるニーズに基づいた活動が計画される。

幼稚園の環境は、子どもが主体的に関わり内面を豊かにすると共に、それを表出する手段としての観点から精選されていく。①フレーベルの恩物：ボールや積木（平たくて細かい材料は利用しない）、②フレーベルの作業：砂、粘土、折り紙・切り紙（子どもの目や神経を痛めるような細かい仕事は行わない）、③描画と彩色、④自然の素材、精選された玩具、⑤物語やお話、⑥絵画、⑦歌、⑧体操、⑨ゲーム、⑩園外保育、⑪自由遊び（保育者の見守りのもと）等が準備される。

表2はクックが年間指導計画の主題としてあげたものである。主題は子どもが家庭、自然、社会の営みを理解できるように、四季の変化に基づきながら選定され、経験できるように考えられている。

1日の活動の流れは表3の時間割に示した通りである。グループによる恩物・作業や静と動の活動が子どもの発達を踏まえて生活の中に位置づけられるようになった。

この時間割はピービーによってクックの教育理念が実現された1930（昭和5）年には、表4に示すように大きく変化している<sup>9)</sup>。表4は立花の報告から作成したものである。立花は10時までの自由作業の子どもたちの様子を克明に記している。「毎朝お早うがすみ、荷物の整理を終えた小さな子供達が、第一に心を奪われるのは砂場、鶏子や、花畑等、戸外のもので、雨の降らぬ限り、小さな如露を飽きもせず、池の水を汲み入れ丹念に草花

表1 子ども主体のカリキュラム

<p>聖句（ヨハネ10:10） わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。</p> <p>目的 「子どもたちと共に生きる」こと。適切な環境のもとで行われる日々の経験を通して、幼児たちの生活を解釈し、家庭の基礎を築くこと。幼稚園は（a）個人的に（肉体的、精神的および霊的に）（b）社会的に（家族、地域社会、国家さらに人類の一員として）教育を実行する。</p> <p>方法 遊びによる教育。神が与えられた合自然な遊びの本能を利用したり、幼児の興味や知りたいとかやってみいたいという欲求を刺激したりすること。幼稚園の日々の活動は、幼児の本性や他児との交わりの中で日々成長しつつあるニーズに基づいて計画されること。</p> <p>（1）肉体－規則的な身体的訓練によって、脚や腕力、感覚、身体器官のあらゆる力を保持し、発達させる。（幼児たちは内科医の監督の下で守られること）<u>自然の子として</u></p> <p>（2）精神－遊びの材料が与えられることによって、幼児の思考力は育まれる。明確な目的に向けて利用するとき、幼児を知的表現へと導く。<u>人の子として</u></p> <p>（3）霊－非常に邪悪な幼児の不道徳的な段階を理解し、幼稚園段階において基礎としての肉体と精神の正しい基礎習慣を形成したり、より意識的な道徳的目的や正しい行動を保持したりする。あらゆる真なる生活の基礎であり、最高の神との意識的な関係は祈り、賞賛、正しい行いによって確立される。<u>神の子として</u></p> <p>材料 フレーベルの恩物、球体とブロック（平たくて細かい教材は利用しない） フレーベルの作業、砂・粘土、折り紙と切り紙、造形、幼児の目や神経を痛めないような廃物を使った作品作り、裁縫用の大きな材料 描画・彩色、自然物、選択された玩具、 物語やお話 絵画 歌 体操 ゲーム 郊外への散歩と自由遊び</p>
--

表 2 年間指導計画の月主題

4 月：幼児は家庭から幼稚園にやってくる。その家庭と園の類似点と相違点を話す。家庭も幼稚園も共に、規則的な習慣形成や義務を担う役割がある。幼稚園では、より意識的に家庭的な義務が求められる。戸外への興味を育むために、遊びや本物の園芸を始める。太陽や雨を関連づけたり、覚醒しつつある自然を観察したりする。イースター
5 月：鳥、花、昆虫。個々の家庭や幼稚園に制限された人間への興味を、地域社会へと拡大する。多くの家庭、店、農場が幼児の食べ物や衣服の供給に関わっている。
6 月：人間界と自然界における仕事の分担を考える。 家 庭－父親の仕事、母親の仕事、幼児たちの仕事 地域社会－農夫、商人、教師、銀行員、牧師 自 然－ミツバチと花、そして人間
7 月：夏に向けて、人間界と自然界との関連を見直す。
8 月：休暇－家庭は幼稚園が 4 ヶ月間行ってきたことを維持し、深めることが求められる。
9 月：夏の経験の振り返り。秋への準備をする。多くの戸外での時間、自然の中で進んでいる変化に気づき、人間生活との関連を意味づける。太陽や雨同様風との関連に気づく。
10 月：9 月の主題の続き。家庭での食事や衣服の変化を見る。商店や畑も共に変化している。
11 月：冬への準備－住まい、食事、衣服。必要な供給物の輸送。人、動物、植物を用意する。感謝祭。
12 月：冬の生活や休養の意味の見直し。より充実した生活。神からの最善の贈り物。クリスマス。
1 月：冬の不思議。霜、雪、氷と太陽、雨、風との関連。
2 月：自然や人の生活における相互依存と有用さ、室内の植物や小動物への行き届けた世話。印象を深めたり、自覚した考えを保証したりするための援助を準備する。
3 月：1 年間の活動の振り返り。天候が許す限り、戸外での多くの生活や観察。人や自然に対する春の意味。イースターの準備。桃の節句。年長児の卒園。

表 3 時間割

教師は 8:30 から責任を持つ。ピアノによる合図。
教師の挨拶、時にお話
9:00-9:45 静かな音楽、お祈り、みんなに挨拶 カレンダーに印を付ける。スキップ 会話－クラスでの新しい経験に参加したことを話す。
9:45-10:30 グループに分かれて恩物あるいは作業
10:30-11:00 年少児－戸外での活動 年長児－ゲームあるいは劇遊び
11:00-11:30 年少児－室内でのゲーム 年長児－戸外での活動
11:30-12:00 グループに分かれて恩物あるいは作業
12:00- 1:00 昼食、降園のための身支度

表 4 時間割

8:30-10:00 登園から自由作業
10:00-10:20 朝の集まり（主に礼拝）
10:20-11:00 おやつ（手洗いを済ませ机を拭き、後片付けをする）
11:00-11:15 会話（朝の仕事の批評、話や歌の発表）
11:15-11:40 戸外遊び
11:40-12:00 ゲーム・リズム
12:00 降園

にかけ歩きます。亦藤棚の下で一新に砂を叩いて喜んで居ります。

但し大きい組の子供達は、登園すると直ぐテーブルに着いて各々自分の仕事を考えます。家から予定をつくって来た子供、途中で暗示を得て来た子供、友達に刺激された子供、みな何か目的を抱いて居り、各々好む材料を選んで、日数と時数を問わず完成するのに一生懸命努力

するのであります。同一の製作が繰り返されて、続く場合も勿論ありますが、尚後から後から変化されて、面白く新しいものがずんずん発表されて居ります。」と報告している。そして、観察によって記された遊びの動機、進行、過程、結果等を参考に、子どもが作る興味深いものの例として紹介しているのが、木で作られた舟や帆かけ舟、クレヨン染のテーブルクロスやハンカチーフ、人形の着物、空箱や粘土の動物園等である。

1 日の流れは 1 時間半に及ぶ自由な活動が終わると、10 時前には部屋の整理をして朝の集まりが始まる。20 分程で集まりが終わると間食の時間となる。40 分位で片付けがすむと、会話の時間である。朝作った作品を批評したり、子どもが話をしたり、歌を発表することもある。後は天候が許す限り戸外での遊びが続き、降園前の 20 分間はゲーム・リズムが行われる。

ところで、こうしたランバス女学院の保育実践に大きな影響を及ぼしたのが、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ附属幼稚園のコンダクト・カリキュラムである。このカリキュラムはヒルと教師らが附属ホーレスマン幼稚園と同初等学校の第 1 学年を対象に編成したものである。

## 2. コンダクト・カリキュラムの教育理念と方法

附属ホーレスマン校では 1900 年から 1910 年代にかけて、子どもの本能的な性向としての自己表現の一つとしての線画、描画、模型製作、構成といった「手作業」を通して「衣食住の獲得に関わる産業の発展を、その最も単純な時代から辿らせ、現代文明との関連からそれらの

意味を理解するに至るまで」追体験させる意図をもったカリキュラム改造が進められていた<sup>10)</sup>。コンダクト・カリキュラムはこうした初等学校の動向において孤立状態にあったホーレスマン幼稚園が1915年以降、初等学校との関係を模索する中で実験を繰り返し、開発したものである。コンダクト・カリキュラムの特徴は、日常の作業動作に重きを置いた生活カリキュラムであったという点にある。ヒルらの実験は教師が前もって決めた活動の時間的配分に汲々とし、子どもを一律にコントロールする指導形態を、共同作業を営む空間、場を組織することによって、子ども自らが向上心や学習意欲を持って仲間と関わり、新しさに挑戦し、変化を求める中で、自己活動を育み、生活習慣を身につける方法を探ることにあった。ところが、ヒルが危惧したように、子どもたちが日常の雑事や遊びを一緒にに行い、協同で責任を負う中で、共有化を図り、集団性、協同性や技術性を高められる相互生活を確立できない教師たちは、開発した「習慣目録」を特定の望ましい習慣を教え込む手段に用いたのである<sup>11)</sup>。

杉浦もまた、ヒルが初等学校との関係改善を視野に入れながらも、幼稚園の独自性として重視したのは、「作

業時間」において子ども自身が日常の遊びからおのずと展開していく目的、創造的活動であり、それを通して形成される責任、協力、公正といった社会的・道徳的内容を重視する「望ましい社会的習慣」であったという<sup>12)</sup>。

まず表5から、コンダクト・カリキュラムの「教育原理」と「方法」から見ておこう<sup>13)</sup>。コンダクト・カリキュラムは、子どもが「できる限り自分で、目的をたて、計画をなし、それを遂行し、その結果を評価する」という目的的活動を通した教育を全面に打ち出し、それによって「従順、他者を思いやる気持ち、尊敬や敬愛の態度や習慣」といった望ましい社会的習慣を身に付けることに目的がある。教師が教え込むのではない。社会の縮図である幼稚園での生活を通して望ましい習慣形成が目指されていく。

教師は、精選した材料によって起こってくる活動を吟味しながら子どもの進歩を記録し必要な経験を与えなければならない<sup>14)</sup>。子どもは、教師が提示する材料に主体的に働きかける。偶発的に始まった遊びが明確な目的を持ち継続されるようになると、新たな発見によって修正され、より緻密な計画を立て確実性、継続性、独創性を増す。個々の遊びから集団での遊びへと発展し、より組

表5 コンダクト・カリキュラム

## 1. 教育原理

- (1) 幼稚園及び第1学年級の子どもの取り巻く環境は、その身体の発育のために、あらゆる機会を与えられなくてはならない。
  - (a) 衛生的環境、空き地、日光、空気
  - (b) 自由に動き回ることのできる環境と活動を促す材料
- (2) 環境は子どもの個性を考慮し、その知的発達を促すものでなければならない。
- (3) 子どもの情緒的生活はバランスが保たれるようにすべきである。身体的かつ精神的緊張を避けるとともに、感情の過度な興奮を慎むことが重要である。
- (4) 社会的組織はその精神において民主主義的であること、さらに次の点を考慮すべきである。
  - (a) 子どもたちに権限、リーダーシップ、分担、協同の精神を培うこと
  - (b) 子どもたちに徐々に集団の組織や行為のために責任を持たせるような機会を与えること
- (5) この年齢の子どもにとって道徳的訓練は主に社会的順応によってなされる。教師はそのような訓練の機会を意識して従順、他者を思いやる気持ち、尊敬や敬愛の態度や習慣をつける必要がある。実際の宗教的経験を子どもに与える程度は個々の教師が決定すべき問題である。

## 2. 方法

### (1) 子どもの役割

子どもは周囲に役立つように置かれた様々な材料に働きかけ、自分の課題解決のために利用する。子どもは教師や仲間によって与えられた刺激に反応する。子どもはできる限り自分で、目的をたて、計画をなし、それを遂行し、その結果を評価する。子どもはいかなる場合に、教師や仲間から援助を求め、いかなる態度でその暗示や批評を受け取るべきかを学ぶべきである。子どもは集団の中であって、指導者であろうと従者であろうと仲間と円滑に仕事をなし、材料を分かち合い、時には集団の利益のために個人の興味を犠牲にすることを学ぶべきである。

### (2) 教師の役割

教師は子どもに望ましい反応を引き起こすような環境を提供すべき役割を担っている。教師はその環境を統制するのであって、支配することがあってはならない。教師は一步一步作業の標準を上げていくために

- (a) 必要な時には技術、情報、暗示、批評をもって援助すること
- (b) 子ども自身が価値ある課題を持たない時や、ある特殊な作業が必要と判断した時には課題を与えること

教師は子ども一人一人を研究し、彼らの作業や進歩の詳細な記録を採っておくべきである。

### (3) 題材

カリキュラムの題材は教師と子ども双方からもたらされるが、それは様々な方法から起ってくる。

- (a) 与えられた環境に子どもたちが応答することから生まれるもの
- (b) 教師や仲間からの直接的な暗示によるもの
- (c) 慣例によるもの

織的に活動が進められていく中で、子どもは仲間との関係性を身に付け、交渉を通して望ましい社会的態度を学び取っていく。

教師は子どもに望ましい反応を引き起こすような環境を提供することが求められているが、その核となるのが題材である<sup>15)</sup>。題材は教師、子ども双方からもたらされるが、2歳から7歳の子ども達の興味は直接的で個人的であり、題材が1つの興味に集中して起こることはめったにない。クリスマスや春祭りを準備するような場合に、手工、劇遊び、歌や他の活動などこうした行事への興味から自然に起こりうることは想像される。しかし、このように子どもたちから起こった題材が必ずしも同じ価値を持つわけではない。教師は価値を識別し、価値あるものだけを選択する必要があるのだが、どのような活動を選びどのように働きかけるのかが問われる。この点を「作業時間」での活動内容、活動の価値測定基準からみておこう。

表 6 時間割

8:45-10:00	登園、靴の履き替え、 <u>作業時間</u>
10:00-10:30	あつまり：お話、歌、リズム
10:30-11:00	おやつ準備とおやつ
11:00-11:10	休息
11:10-11:30	靴の履き替え、皿洗い、物語
11:30-12:00	多様な活動：ゲーム、戸外遊び、楽隊、見学等

### 3. 「作業時間」と代表的な活動

ここでは、表 6 の 4 歳～6 歳児の時間割にそって子どもたちの生活を見ておこう<sup>16)</sup>。作業時間は固定されない。登園した子どもたちは身支度を整え、思い思いに動植物の世話や活動を始める。子どもたちが勝手に活動を選ぶので、多様な活動が展開する。教師の役割は集団での遊びを必要と判断すれば、大型積木で遊ぶ集団に加わるように指導したり、活動的な遊びばかりの子には机での静かな作業へと誘いかけたりする。もっとも重要な教師の役割は子ども一人ひとりの思考・態度及び行為を最高点にまで高めることにある。運動遊具、大型積木、木工などを整えた環境で展開される、①身体的発達を促す活動、②協同的活動、③問題解決が必要となる構成遊び、④人形に必要なものや自身のエプロンなど作る活動、⑤想像遊び、⑥作業の片付けや動植物の世話など責任感を学ぶ活動等を、発達の広がり、材料の使用法や用途の合理性、発達の深まり、といった基準から測定し、望ましい社会的習慣への価値が測られる。

表 7 に、「作業時間」の代表的な活動の一つである「積木」の内容例から、求められる望ましい社会的習慣を見ておこう<sup>17)</sup>。活動は 2 歳から 7 歳までの 4 グループに分けられ、その変化が記されている。ここではグループⅡとⅢに注目し、その活動の中身と「思考、感情及び行為の望ましい変化」を見ておこう。活動の中身では、

表 7 「積木」の内容例

	材料	
	2 の組 ヒルの積木（柱は使用せず） 多種類の積木（大量の大型恩物積木等） 3 の組 ヒルの積木（柱を使用する） 多種類の積木、スタービルト積木、他の遊び道具－家具や玩具など	
	代表的活動	思考、感情及び行為の望ましい変化
グループⅡ (4 歳～5 歳)	積木の出し入れと後片づけ 一人または群れのような集団での組み立て 以前よりも明確な観念をもって作る－積木もより多く使う。 作ったものを汽車、家等と命名し、それで遊ぶ。	グループⅠの続き 他児の仕事に対し興味を持ち始める。 模倣によって観念を持つようになる。 計画を立てる力が実験しているうちに育ってくる。
グループⅢ (5 歳～6 歳)	積木の出し入れと後片づけ 一人であることもあるが、頻繁には自発的に組織されたリーダーや従者に分かれ協力して遊ぶ。 明確な目的をもって組み立てる－常に組み立てる前に計画を持っている。  様々な目的をもって組み立てる： 家、病院、店舗、駐屯地、船、車、汽車、トラック等（遊びへの興味が建造物の完成を邪魔する－子どもたちは建造物が完成する前に船に乗って遊ぶ。） 車輪や棒で実験する。 スタービルト積木を利用する（主として実験的方法で）。	グループⅡの続き 積木を取り扱い、安全に組み立てる。 組み立てをする場合には静かに、迅速に、安全にする。 次の能力が育まれていく： 協力して仕事をする。 一緒に計画する。 共通の目的を達成するために互いに考えを検討し合う。 問題により長時間集中する。 組み立て活動への興味が増す。 造形物への興味が増す。  積木を連結する新しい方法への興味 小さな積木の取り扱いが巧妙になってくる。

子どもたちがイメージを共有して目的に向かって組織的に遊びを進められるようになってきた点にある。また、望ましい変化では、明確な目的と計画性が発揮され、一人遊びから集団遊びへと移行する中で身に付ける協同性、集中力、思考の吟味にある。

「コンダクト・カリキュラム」はこのように、「材料」「代表的な活動」「思考、感情及び行為の望ましい変化」をセットにした「習慣目録」の作成によって、教師が行うべき指導を「思考、感情及び行為の望ましい変化」との関係から明確化し、その成果を評価できるようにした。しかし、それは先にも触れたように、教師があらかじめ決められた「望ましい変化」を教え込む手段となる危険性をはらむことになった。

## Ⅱ ランバス女学院附属幼稚園の保育案

### 1. 週案に見る子どもの実態把握と環境構成

ランバス女学院附属幼稚園の保育案は、①行事、②徳

目、③週題、④作業及び活動、⑤歌・遊戯、⑥リズム、⑦童話、⑧会話、⑨観察、⑩生活習慣、⑪礼拝、⑫備考、といった12の欄に実施される題材や留意点が記されている<sup>18)</sup>。

4月4週分の週案を表8にあげておく<sup>19)</sup>。4月は2週続きで、幼稚園生活への馴化が週の主題（週題）にとりあげられ、その後は「幼稚園と家庭の礼儀」、「春の自然界」と続く。生まれて初めて親元から離れた新入園児にとって重要なのは園生活に慣れることである。不安と期待をもってやってきた子どもが安心して生活するにはまず、最低限の生活習慣が必要になる。子どもたちは登園してくると、下駄や道具類など自分の身の回りのものを整理し、必要な準備を整える。園内の保育室、トイレや手洗場の位置を知り、用便をしたり、食事の前や作業の後で手を洗ったり、身じまいをしたりする。生活習慣が年間指導計画に盛り込まれたのは、コンダクト・カリキュラムの影響もあるが、こうした日常生活に必要な生活

表8 週案

#### 4月 幼稚園と家庭

行事	入園式 始業式 神武天皇祭 天長節 復活祭 フレーベル記念日
徳目	親睦 規律 親切 礼儀 感謝
週題	幼稚園生活への馴化（お母様と先生・女中さんのいない幼稚園）
作業・活動	積木 まりつき おにごっこ ままごと 自由画 ぬりえ 摺紙 棒さし 切紙 貼紙
歌・遊戯	僕は軍人 鳩ぽっぽ 白地に赤く お早う先生 サヨウナラ先生 新入園児が知っているもの 指の家族
リズム	マーチに合わせてお歩き 手をたたく
童話	桃太郎 おむすびころりん 泣き虫のお話 忘れん坊のお話 ぬりん坊のお話 元気な子供のお話
会話	先生の名前を覚える 自他の区別 自分の持物 部屋について 友達の名前を覚える 自分の事は自分で できない事は先生に話す お母様の代わりの先生 時刻を守る事
観察	遊びの材料 お仕事の材料
生活習慣	便所の作法 下駄・道具類の整理 園内案内 手洗場の扱い方 お湯を飲む場合 雨降りの日の注意 お道具箱の出し入れ
礼拝	讃美歌 祈りの形式を覚えさせる 特に静粛を守らせる
備考	新入園児は先ず幼稚園に親しませる事 特に先生に 遊びの材料 歌等 家庭にて慣れたものを多く お仕事・童話は第一週目にはなくてもよい

#### 4月 幼稚園と家庭

行事	入園式 始業式 神武天皇祭 天長節 復活祭 フレーベル記念日
徳目	親睦 規律 親切 礼儀 感謝
週題	幼稚園生活への馴化（続）
作業・活動	第一週に同じ
歌・遊戯	第一週に同じ その他：むすんでひらいて 指の家族のうた 庭にて遊ぼう 番太あそび まりかくし
リズム	第一週に同じ
童話	花ちゃんのお友達 かえかえっこ
会話	遊ぶ時の注意 危険な遊びをしない事 友達と争はない事
観察	第一週に同じ
生活習慣	遊ぶ時の注意 絵本・積木等遊びの後のあとかたづけ 時間を守る事 自分の事は自分でする事
礼拝	第一週に同じ
備考	子どもの興味を引く様に注意しつつお仕事・遊びの材料を与える よい習慣をつける事を念頭に置く 楽しい幼稚園とする

## 4 月 幼稚園と家庭

行事	入園式 始業式 神武天皇祭 天長節 復活祭 フレーベル記念日
徳目	親睦 規律 親切 礼儀 感謝
週題	幼稚園と家庭の礼儀
作業・活動	粘土 織紙 砂遊び 花に水をやる 麦わら
歌・遊戯	大きくなれよ・・・ レコード サイタサイタ やすめ やすめ 春がきた 天長節の歌 君が代
リズム	おあるき けんけん
童話	しげるさんの一寸（おねんねするまで） 楽しいおうち 三匹の熊
会話	お母さんについて語る 家を出る時の挨拶 家族各自の義務 お友達に対する挨拶（ありがとう、ごめんなさい、すみませんの言葉） 先生に対する挨拶（サヨナラ、オハヨウ）
観察	楽しいお家の絵 桜の花 動物の親子の絵 母と子の絵
生活習慣	挨拶ははっきりとていねいに
礼拝	子供の友は・・・ 古い子供に御祈りをさせる
備考	出来るだけ外に出す

## 4 月 幼稚園と家庭

行事	入園式 始業式 神武天皇祭 天長節 復活祭 フレーベル記念日
徳目	親睦 規律 親切 礼儀 感謝
週題	春の自然界（雨、太陽、植物のめざめ、動物のめざめ、さくら、とのさまがえるについて
作業・活動	自由画 畳紙 等加える 砂遊び 国旗作製
歌・遊戯	君が代 天長節の歌 けむし けむし 小さいお庭
リズム	雨や風をリズムに合わせる
童話	おむすびころりん あべこべ村の幼稚園の子供のお話（協力一致）
会話	春の花について 天長節の話 日本の国の話 蜂や蝶の生活 かえるの話 雨や太陽のめぐみ 植物が生長するまで 動物の冬眠とめざめまで
観察	さくら とのさまがえる 新芽 つばみ 動植物園の見学
生活習慣	第一、二、三に同じ 事物をよく観察する習慣をつける
礼拝	讃美歌 花よ花よ パラバラおちる 野外礼拝をする
備考	天長節は天皇陛下の逸話や皇室のお話 天皇陛下のお写真を準備する

の仕方は入園当初に限らず、幼児期の子どもにとって、一つひとつ学んでおく必要があり、身につくように仕向けていかなければならないと認識されるようになったからだともいえよう。

第 1 週目の備考には、「新入園児は先ず幼稚園に親しませる事」「特に先生に」「遊びの材料、歌等家庭にて慣れたものを多く」「お仕事・童話は第 1 週目にはなくてもよい」等と記し、子どもの実態に即した材料を整えることで、家庭から徐々に園生活に親しませること。さらに第 2 週目には、「子どもの興味を引くように注意お仕事・遊びの材料を与える」「よい習慣をつける事を念頭に置く」「楽しい幼稚園とする」というように、幼稚園教育の目的と方法が簡潔に記されている。幼稚園は子どもの興味を引く材料を精選して環境を整え、楽しい生活を送る中で、社会的・道徳的によい習慣を形成していく役割を担うものととらえており、クックの教育原理よりもコンダクト・カリキュラムのそれに近いともいえよう。

第 3 週目には、「童話」や「会話」を通して家庭を支

えている家族のことや自分でできることについて考え、自分の役割を積極的に果たすとともに、幼稚園での先生や友達との意欲的な生活へと導く。そうした身近な人とかかわる基本的な方法を身に付けると同時に、戸外への興味を育むために、「作業・活動」では「砂遊び」や「花の水やり」へと誘ったり、「さいたさいた」「春の歌」等を歌ったり、「桜の花」を観察することで、春の訪れを体感させる。

そして、第 4 週目には「春の自然界」という週題のもとに、「歌・遊戯」で「けむしけむし」を歌ったり、「会話」では教師が「春の花について」「かえるの話」「雨や太陽の恵み」「植物が生長するまで」「動物の冬眠からめざめまで」を語って話し合ったり、「観察」では「さくら」「とのさまがえる」「新芽」「つばみ」等を見に出かけたり、覚醒しつつある自然や動物を観察するために「動植物園の見学」がなされる。

## 2. 主題の選択

表 9 は月主題と週題の一覧である。表 2 に示したクッ



ク作成の年間指導計画の主題と照らし合わせながら分析しておこう。

4月の主題は家庭から幼稚園へとやってくる子どもたちそのものである。子どもが園に慣れ先生や友達とのかかわりに親しむに連れて、徐々に戸外の自然へと目が向くよう週題が考えられている。

クックによれば5月の主題は鳥、花、昆虫といった生物に加え、食物や衣服が選ばれる。食べ物や衣服によっ

て、個々の家庭や幼稚園に制限されていた子どもの興味は、販売先の店や生産元の農場である地域へと広がっていく。これに対し保育案の月主題は、「端午の節句と自然観察」である。第1週目では、「端午の節句」のもとに、健康と運動によって丈夫な身体を育むことが取り上げられる。2週目の「遠足・蜜蜂」では、山の自然を求める遠足や、農家で育てられている蜜蜂の生活が中心となる。3週目では「母の日」を記念して、感謝の気持ち

表9 主 題

月	主 題
	月主題：幼稚園と家庭
4	第1週 幼稚園生活への馴化 第2週 幼稚園生活への馴化（続き） 第3週 幼稚園と家庭の礼儀 第4週 春の自然界（雨、太陽、植物の目覚め、動物の目覚め、さくら、とのさまがえるについて）
	月主題：端午の節句及び自然観察
5	第1週 端午の節句 第2週 遠足・蜜蜂 第3週 母の日・動物園 第4週 蚕・渡り鳥
	月主題：梅雨
6	第1週 夏の衛生（蠅について、虫歯について） 第2週 雨、虹、時の記念日 第3週 水（水蒸気、川、雲、雨、雪、霰、雹、霧、露、霜、地下水、泉） 第4週 6月の自然（かたつむり、はたる、はす、へちま、めだか、金魚、えび、いか、はまぐり、麦）、子供の日
	月主題：夏の自然界
7	第1週 七夕様・天体の話 第2週 食物について（野菜、果物、飲み物） 第3週 海山の旅行（海水浴、登山） 第4週 夏休みの計画及び準備、自然界（朝顔、蝉、蚊）
	月主題：秋の自然界
9	第1週 夏休み中の経験 第2週 秋の植物について及び野菜・果物 第3週 お月見 第4週 秋の昆虫（すずむし、まつむし、かんたん、あおまつむし、えんまこおろぎ、こおろぎ、うまおい、くつわむし、かねたたき、くさびばり）
	月主題：健康
10	第1週 運動会 第2週 秋祭りと冬物売出し 第3週 自然界（茸狩、候鳥、紅葉、栗拾い）、昆虫の冬籠り 第4週 冬の準備（農園の冬の準備、動植物の冬の準備、社会の冬の準備）
	月主題：収穫
11	第1週 橋に就いて 第2週 木の葉に就いて 第3週 感謝祭 第4週 燃料
	月主題：クリスマスと歳暮
12	第1週 キリスト降誕の準備 第2週 愛（神は愛なり、汝の隣を愛すべし） 第3週 奉仕（受くるよりは与えるは幸いなり） 第4週 クリスマス祝会、終業式
	月主題：新年
1	第1週 お正月の経験（お餅つき、お正月の食物、年賀状について、遊戯、新年の決心） 第2週 一年間（春夏秋冬・植物の一年・五節句・幼稚園・一年の行事・着物の一年） 第3週 郵便（郵便物の種類、昔の郵便、航空便、便りについて、切手の種類、郵便屋さんに対する感謝） 第4週目 交通機関（飛行機、汽車、船、自動車、電車）
	月主題：強い子
2	第1週 遠い先祖について（どんな人か、どんな着物をきていたか、職業は、どんな家に住んでいたか、どんなものを食べていたか、どんな遊びをしていたか） 第2週 雪の国の人々の生活（寒い世の国、脂肪と鯨脂、二枚重ねの毛皮の着物、トンネルから入る家、まる木舟） 第3週 光について（自然の光：太陽・月・星、人工的な光：電気・ローソク・たい松・ガス・ランプ、夜の光：月・星、電燈、ランプ、ガス、ローソク、ネオンサイン、灯台について、警燈：シグナル、天気予報） 第4週 自分の住む家、街、国
	月主題：雛祭りと卒業
3	第1週 雛祭りの経験（昔の雛祭り、雛人形について、雛祭りのお客様） 第2週 花壇（手入れ、種蒔きの準備、球根について） 第3週 鶏とひよこ 第4週 卒業式（幼稚園時代の回顧、小学校と幼稚園、卒業後と幼稚園）

を贈り物に表現したり、「動物園」を見学したりして動物の親子のかかわりを観察する。4 週目の「蚕・渡り鳥」では、渡り鳥であるつばめや蚕が取り上げられる。蚕は繭から、絹糸の生成までの工程を辿るなど、人間の生活との結びつきが追究される。

クックの 6 月の主題は人間界と自然界における仕事の分担から選ばれる。家庭での父や母、子どもの仕事に加え、農夫、商人、教師、銀行員、牧師の仕事について考える。さらには蜜蜂と花、それを育てる人の働きが主題となる。一方、保育案での月主題は「梅雨」が取り上げられ、第 1 週目には衛生面から「蠅や虫菌」への注意が喚起される。2 週目には田植えに欠かせない「雨」や雨上がりの「虹」、「時の記念日」が週題となる。さらに 3 週目には、雪・雹・霧・霰等の気象現象、第 4 週目にはかたつむり、蛭等生物が週題となる。

続く 7 月、クックの指導計画には「夏に向けて、人間界と自然界との関連を見直す」と記されているだけだが、保育案の月主題は「夏の自然界」であり、天体、海や山、それと関わる人の生活が取り上げられる。週題を順にみていくと、七夕様（天体の話）に始まり、食物について（野菜・果物、飲料水）、海山の旅行（海水浴、登山）、夏休みの計画及び準備、朝顔・蝉・蚊など身近な自然が取り上げられる。第 3 週目の「海山の旅行」では、海辺に出かけ貝拾いや汽船を見たり、童謡「汽車」「汽車ぽっぽ」などを歌ったりしながら、汽車・汽船・魚の絵を参考に木工や積木を使って表現活動を楽しむというように、主題による統合がなされていた。

表 10 は週題を類型化したものである。週題の中には

表 10 週題の類別

類型	数
家庭生活 (幼稚園生活への馴化、先祖、雪国の人々の生活等)	7
園生活 (夏休みの計画や準備、夏休み中の経験、運動会、卒業式等)	10
地域の生活・産業 (運輸・施設)	10
行事 (端午の節句・七夕様・クリスマス・お正月等)	10
季節 (春夏秋冬の自然・年間等)	9
生物 (動植物)	13
野菜・果物 (食物)	3
気象現象 (地球・宇宙、雨・虹・霧等)	7
宗教心 (キリスト降誕の準備、愛、奉仕)	3

「秋祭りと冬物売り出し」など 2 つ上がっている場合、秋祭りは行事、冬物売り出しは地域の生活・産業に分けた。また、秋の昆虫（鈴虫、松虫等）の場合は季節と生物に分けてカウントした。野菜・果物と宗教心の主題は少ないが、身近な自然や社会事象からバランスよく選んでいることがわかる。

### 3. 保育の構造と教師のまなざし

ピービーは「店、駅、郵便局、消防署等子どもの興味を刺激するような社会生活が営まれている場を見学させたり、珍しい本や絵を見せたり、子ども自身に自分の経験を話させたりすると共に、そこで得た観念を創造的作業へと発表するための環境整備」を教師たちに求めている<sup>20)</sup>。

ピービーの指摘に基づく、備考を除く 11 の欄から構成されるランパス女学院の保育案は (a) 目指すべき社会的・道徳的習慣（「徳目」）、(b) 週題（「行事」）、(c) 自由作業の材料（「作業・活動」）、(d) 創造的作業を生み出す題材（「歌・遊戯」「リズム」「童話」「会話」「観察」）、(e) 日常生活（「生活習慣」「礼拝」）の 5 つの層で捉えられ、週題のもとに統合されていく。つまり、週題（時に「行事」を含む）のもとに「歌・遊戯」「会話」「観察」等の題材は統合され、子どもたちはそこで得た観念を「作業・活動」の積木や自由画のテーマとして発表する。こうした創造的作業を通して子どもたちは望ましい社会的・道徳的習慣を形成していくといった具合である。

では、10 月第 2 週目の週案から、ピービーが重視した教師の役割についてみておこう。10 月には運動会が実施され、健康への配慮とともに、子どもたちは一つの目的に向かって力を合わせて取り組む機会を持つ。身近な地域の店の冬物セールや秋祭りが週題となり、子どもたちは仲間と共同でお祭りの店や商品を作り上げ、お店屋さんごっこやお祭り遊びを展開する<sup>21)</sup>。

教師は自由作業時間での子ども一人ひとりの活動に新しい材料を用意したり、子どもたちがイメージを共有できるように、話し合いをするようにしむけたり、仲間を増やし、それが組織化するように考えていく。部屋に台を用意し、粘土、紙、きびがら、麦わらなどを使って商品づくりを始め、みんなで「店と商品をつくる」という目当てを持ち、手分けして、知恵や力を出し合いながら、遊びが展開していく。お祭りの内容に広がりや深まりが見られ、まとまった遊びになる。つまり、週題を中心に統合された「作業・活動」「歌・遊戯」「会話」「観察」の題材を通して子どもが自ら考え試行錯誤する中で、生活内容が豊かになり、仲間とのかかわりができて

## 10月 健康

行事	遠足 運動会 神嘗祭 靖国神社祭
徳目	運動精神 努力 共同 親切 礼儀 勇気
週題	秋祭りと冬物売出し
作業・活動	お祭りあそびのおもちゃ 切紙 貼紙 お店あそびをする 果物をつくる 粘土 きびがら 麦わら
歌・遊戯	お祭り太鼓 おめめのさめた栗鼠 秋の歌 秋だよ秋だよ
リズム	
童話	お目々のさめた栗鼠
会話	秋祭りの伝説について 秋祭りの意義 みこしやだしを見る時の注意 お祭りの注意する事項（お客様のあった場合 飲食物） 近頃の商店 夏物と冬物の比較
観察	冬物 夏物 お祭りの絵 織物の種類 お祭りの店と玩具 葉子のよしあし
生活習慣	
礼拝	敬神の念を起こすよい機会となるように氏神のお祭りを導く
備考	

くると「作業・活動」もまとまりのある創造的製作へと発展していく。コンダクト・カリキュラムが目指したように、参加するすべての子どもが共通の目標を持ち、それを実現するために、さまざまなやり方で取り組む中で、「徳目」に掲げられた望ましい社会的・道徳的習慣を身に付けていく。教師があらかじめ決められた「望ましい変化」を教え込む手段となる危険性をはらんでいたコンダクト・カリキュラムとは対照的に、ランバス女学院の保育案では、教師は様々な題材を通して子どもたちの興味を刺激し創造的な製作へと導き、「主体的、対話的で深い学び」を生み出していく。

ランバス女学院は戦争が激化する中、退職を余儀なくされた宣教師たちが帰米し、20年の歴史を閉じる。しかし、聖和女子学院附属聖和幼稚園は1942（昭和17）年に開設され、立花が主任となり、その伝統は受け継がれていく。

次に、1943（昭和18）年の聖和幼稚園の日誌を手掛かりに、教師の指導を支える子ども理解を見ておこう<sup>22)</sup>。環境による子どもたちの興味の刺激と創造的な製作の実際から、望ましい社会的・道徳的習慣の獲得を目指す教師に求められるのは何か。

10月23日に、子どもたちは阪神パークに遠足に出かける。動物園で鶴、白鳥、鴨、ライオン、虎、ペンギン、ラクダ、キリンなどを見た子どもたちは、鳥にも蛇にも満足し、いろいろな質問を教師に投げかけた。しばらく遊園地で遊んでお弁当を食べた子どもたちは水族館を見学した。亀や魚の泳ぐのを見て「きれいね、きれいね」と感心したり、「面白かった。またこようね」と感想をもらしたりするほど、遠足は子どもたちを喜ばせた。教師はそうした子どもの様子から「明日は誰かが水族館の遊びか浦島太郎の話でもしないかな」と期待に胸を膨らませた。

翌24日、子どもたちは登園するや否や積木を出し、歌いながら動物園を作り上げていく。動物の檻がつぎつぎにできあがると、教師はすかさず動物の玩具を貸し与える。子どもは即座にその動物を使って遊びを展開していく。教師は、キリンの家はそれが横たわって寝られる広さでないといけないと考えたり、象を汽車に寄せたりして面白そうに遊んでいる子どもの姿から目が離せない。この様子を教師は、「だいたい目的のはっきりして積木ができると遊ぶ時間が長くなったのと第5（恩物）よりも第6（恩物）をみながとりたがるのが近來の傾向である」と記している。

子どもたちは教師の予想をはるかに超え、動物園で得たイメージを積木によって発表していく。教師は動物の檻がいろいろとできあがってくる様子を見ながら、動物の玩具の必要性に気づく。こうした気づきは教師が子どもの世界に入って遊びを共に楽しんでいるからできるのである。教師のまなざしに支えられ、キリンの家はその身長よりも広くするなど、子どもたちはイメージを互いに共有し組み立て方を計画する。計画性や協同性に加え、遊びの継続性や建物の構成に向く第6恩物を選ぶ判断力、思考力が身に付けられつつある。子どもと関わる教師の共感的まなざしこそが、コンダクト・カリキュラムには見出せなかった子どもの「主体的、対話的で深い学び」を展開させる鍵だといえよう。

## おわりに

南信子が1939（昭和14）年に学んだ「保育案」を手がかりに、クックが広島女学校附属幼稚園において目指した子ども主体の保育に見られる「主体的、対話的で深い学び」の実際を解明した。その結果、次の3点が明らかとなった。①週題を中心に統合された「作業・活動」「歌・遊戯」「会話」「観察」の題材が子どもの生活内容

を豊かにし、個々の「作業・活動」は仲間との相互生活を通してまとまりのある創造的製作へと高められていくこと、②この創造的製作が「主体的、対話的で深い学び」を生み出し、望ましい社会的で道徳的な習慣形成に繋がること、③子どもの「主体的、対話的で深い学び」を生み出す鍵は教師の共感的まなざしであること、である。

最後に、こうした広島女学校の取り組みは今次の改訂幼稚園教育要領に示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の記述に大きな警鐘をもたらす。コンダクト・カリキュラムによって提示された「習慣目録」が教師たちに教え込む手段とみなされたように、この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」も達成すべき目標とみなされ、教え込まれる危険性をはらんでいる。

自由保育や協同的活動への理解が進んだ現代では、汐見が言うように、「一般的に保育施設で行われているほとんどすべての活動（遊び）は、すでに『主体的』で、『対話的』」となってきた。とはいえ、汐見が「『は～ん』『そうだったんだ』『やっとなんか！』と、子どもの感情が動くような学び」だと説明する「深い学び」については、「あるテーマを粘り強く追いかけるような遊び、学びが必要」であり、教師が解決すべき課題を残している<sup>23)</sup>。

深い学びには、ピービーが指摘するように、教師が最も優れた価値ある活動、または豊富な活動を選び、子どもたちを導くだけの明確な考えと、そのために必要な材料を数多く用意する力が必要である。そして、その前提となるのは立花が自由保育を通して自ら教えられたという「子どもの成長発達、大人が考えるよりも遙かに幾倍もの様々な様相において発現するもの」だという確信であり、南に受け継がれた保育理論のバックボーンとなった子どもへの畏敬の念である<sup>24)</sup>。1943（昭和18）年の聖和幼稚園の日誌に教師が何気なく記した子どもの「近來の傾向」に潜む、子どもの遊びに共感的まなざしをもって受容し応答する教師の姿こそが今改めて求められる。

#### 謝辞

本論文執筆の資料閲覧にあたり、北陸学院短期大学の熊田凡子講師には格別のご高配を賜りました。この場をお借りして、お礼申し上げます。

#### 注

- 1) 広島英和女学校附属幼稚園は、聖和大学が2013年に廃校になり、現在関西学院大学附属幼稚園となっている。
- 2) 金子嘉秀「明治後期における中心統合主義カリキュラムの受容・実践内容に関する研究－広島女学校付属幼稚園師

- 範科生徒の保育案ノートをとてがかりとして－」『保育学研究』第51号第1号、2013年、6-16頁。拙稿「広島女学校における子ども本位の活動に根ざした保育の確立－アメリカ人教育宣教師 M. M. クックと進歩的な保育の導入」『兵庫教育大学研究紀要』第47巻、2015年、1-10頁。
- 3) 拙稿「子ども主体の協同的活動から自由保育へ」『兵庫教育大学研究紀要』第50巻、2017年、1-9頁。フルトンによる指導法改良の取り組みや自由遊びの導入については、本論を参照。
- 4) ピービー「幼稚園の見学」『ランバス女学院報』第1号、1932年、1-2頁。
- 5) ピーヴィー「現代に於ける幼稚園教育の傾向」『ランバス女学院同窓会誌』1931年、14頁。
- 6) 「立花富によるランバス時代の思い出より」（聖和保育史刊行委員会による1979年10月のインタビュー）2-3頁。（聖和大学歴史資料館所蔵）
- 7) 南信子「保育案」昭和14年（北陸学院短期大学ヘッセル記念図書館所蔵）。手書きの年間カリキュラムである。南はランバス女学院において立花らが展開した保育を“free play and work”を中心とする「自由保育」と述べ、「ランバス幼稚園では、保育科長であったクック先生の発案で『自由作業』を導入することから始まった」と語っている。（南信子編著『花の蕾のひらくとき：北陸学院 幼稚園の物語』博文堂、2000年、395-398頁。
- 8) Cook, M. M., Program Outline for the Year, April 1923-March 1924.（聖和大学歴史資料館所蔵）
- 9) 立花富子「ランバス女学院幼稚園の近況」『ランバス女学院同窓会誌』1930年、47-48頁。
- 10) 田中喜美『技術教育の形成と展開－米国技術教育実践史論－』多賀出版、1993年、293頁。Richards, C. R., “How Early may Handwork be made a Part of School Work?”, National Education Association, *Journal of Proceeding and Addresses*, 1901, p.106.
- 11) 拙稿「保育形態論の確立とコンダクト・カリキュラム－わが国に見る P. S. ヒルの生活形態論の影響について－」『カリキュラム研究』第7号、1998年、39-51頁。ヒルがコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジのスペイヤー・スクール及びホーレスマン・スクールで行った実験内容の詳細は本論を参照。
- 12) 杉浦英樹「プロジェクト法の源流（2）－コロンビア大学附属ホーレスマン校と『コンダクトカリキュラム』」『上越教育大学研究紀要』第19巻第2号、2000年、631-650頁。
- 13) Hill, P. S. (ed.), *A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade*, Charles Scribner's Sons, 1923, pp.10-13. 本書は1936（昭和11）年、ランバス女学院教授であった高森富士によって翻訳され、ランバス女学院から出版された。高森はコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジでヒルの指導を受け、A・Mの学位を取得している。
- 14) *ibid.*, p.11.
- 15) *ibid.*, pp.11-13.
- 16) *ibid.*, p.9.
- 17) *ibid.*, pp.23-24.
- 18) 南、前掲。手書きの「保育案」には頁数が振られていな

い。

19) 「保育案」4月1～4週目までの週案

20) ピービー、前掲、2頁。

21) 「保育案」10月2週目の週案。

22) 「保育日誌」1943年（聖和大学歴史資料館所蔵）

23) 汐見稔幸『さあ、子どもたちの「未来」を話しません

か』小学館、2017年、93頁。

24) 聖和保育史刊行委員会『聖和保育史』聖和大学、1985年、153頁。南は立花の自由保育に関する記述を引用しながら、「この立花先生の実践こそ私の保育理論のバックボーンをなすものです。」と述べている（南編著、前掲書、396頁）。